

SESSION 2011

**AGRÉGATION
CONCOURS EXTERNE**

**Section : LANGUES VIVANTES ÉTRANGÈRES
LANGUE ET CULTURE JAPONAISES**

VERSION SUIVIE D'UN COMMENTAIRE GRAMMATICAL

Durée : 6 heures

Documents autorisés : Dictionnaire Kôji-en, Iwanami, 1983, et rééditions; Dictionnaire Taishûkan kango shinjiten, Taishûkan, 2001, et rééditions.

L'usage de tout ouvrage de référence, de tout autre dictionnaire et de tout matériel électronique (y compris la calculatrice) est rigoureusement interdit.

Dans le cas où un(e) candidat(e) repère ce qui lui semble être une erreur d'énoncé, il (elle) le signale très lisiblement sur sa copie, propose la correction et poursuit l'épreuve en conséquence.

De même, si cela vous conduit à formuler une ou plusieurs hypothèses, il vous est demandé de la (ou les) mentionner explicitement.

NB : Hormis l'en-tête détachable, la copie que vous rendrez ne devra, conformément au principe d'anonymat, comporter aucun signe distinctif, tel que nom, signature, origine, etc. Si le travail qui vous est demandé comporte notamment la rédaction d'un projet ou d'une note, vous devrez impérativement vous abstenir de signer ou de l'identifier.

Tournez la page S.V.P.

1) Traduire en français le texte joint.

色川大吉「自分史とは何か」1992 年。

2) Étudier dans ce texte les différents emplois de la forme verbale dite 受身.

1 自分史とは何か

色川大吉

1 自分史の出発点

人は誰しも歴史をもっている。どんな町の片隅の陋巷に住む「庶民」といわれる者でも、その人なりの歴史をもっている。それはささやかなものであるかもしれない。誰にも顧みられず、ただ時の流れに消え去るものであるかもしれない。しかし、その人なりの歴史、個人史は、当人にとってはかけがえのない“生きた証”であり、無限の思い出を秘めた喜怒哀楽の足跡なのである。

この昭和時代のような激動の時代（これは日本歴史上、戦国時代よりも明治維新期よりも、かつてなかったほど激しく全国民をまきこんだ時代である）に生きた日本人であれば、なおさらである。そこでは、ほとんどの人が痛切なドラマを経験したと思う。一生に幾度も全体史とかかわりあうような普遍的なドラマを演じたと思う。

私はこうした時代に身を置いた一人として自問する。個人にとって真に歴史をふりがえるとはなにを意味するのか。その人にとってのもっとも劇的だった生を、全体史

のなかに自覚することではないのか。そこに自分の存在証明を見出し、自分をそのおおきなものの一要素として認識することではないのか。と。

こう記す私は、その全体史を描くべき職人としての歴史家である。しかし、こと同時代史を対象とするかぎり、一般の人と同じように個人史からはじめることに変りはない。歴史家もまず一人の庶民として、自分の体験に立ち返り、その宿命的に負わされた偏見を修正しつつ、全体性との関連を認識する第一歩からはじめなければならない。

客観的歴史観察と称して、自分を神にもひとしい超越的立場に置こうとすることは、また置けると考えるのは幻想である。不遜である。ひとりの人間がどれほどきつい制限のもとでしか生きられなかったか、ひとりの人間の直接体験と世界認識なるものが、どれほど限られ、どれほど偏ったものであるか、同時代の私たちの眼がどれほど言いたものであったか、知るべきである。

完成された社会理論を杖にして歩いてきた選ばれた人でさえ、誤らないという保証はなかった。かれらが、この激動の歴史の中でいかに躓いたか、いかに翻弄されたか、思うべきである。人は自分の小さな知見と全体史とのあいだのおおきな齟齬に気づいてはじめて、歴史意識をみずからのものにする。とくに同時代に生きる者は、見る主体も、見られる対象も、つねに動いている以上、認識者としての偏見はまぬがれがたい。それゆえにこそ、たえず自己点検と修正の努力が不可欠なのであり、全体性回復への不断の努力が必要なのである。

私が自分をふくめての個人史、自分史からこの叙述をはじめようとするのは、まず自己否定の契機をとおして歴史の全体像へと接近したいからである。読者にもたえずそこに個人史を発見し、同様のことをしてほしいと願うからである。

私は一九二五年（大正十四年）に生れた。したがって、私にとってこの半世紀の歴史は私の生きてきた内容のすべてであり、私の体内を吹き抜けた一陣の突風のときものであった。それはまた、流されつつ流れの中で奮闘したものの自意識からすれば、歴史の観覧車から眺めた激動のドラマ以上のものであり、みずからも愛憎渦巻く泥流だったのである。

私が生れたとき、「大日本帝国」はアジア最強の軍事大国であり、その力は「旭日ニ輝ク」世界三大強国の一つとうたわれていた。私が小学校に入ったとき、すでに日本軍による満州（中国東北部）の占領は終っており、中学に入ったとき、中国との全面戦争が開始されようとしていた。私の住む関東平野の小さな田舎町の駅頭でも、出征兵士を見送る旗の波と「万歳」が絶えることなく、それは私が同じ駅から旗の波で見送られたときにもつづいていた。

私が宿願の高等学校に入学したその年の十二月八日、わが日本の陸海軍は、アメリカ、イギリスなどとの大戦争に突入した。私の青春享樂のささやかな夢はもろくも潰え去った。

日本は緒戦の大勝利で地表の七分の一をおさめる大帝国内に昇りつめたが、その瞬間から、急速に退潮しはじめ、つるべ落しの秋の日のように沈みはじめた。自分の生れ育った祖国を生きるも死ぬもただ一つの運命共同体と信じ、それにすべてを捧げようとしてきた私たち若者の不安と憂愁は深まるばかりであつた。私もその一人として、日本の落日の中で自分の精神を形成した。そのため私たちの世代は、いまだに当時の感覚から完全に抜けきれない虚無の部分を残している。

一九四三年（昭和十八年）、東条内閣は緊急措置によつて高校（旧制）の年限短縮、文科系学生の徴兵猶予の停止を命令した。私はこの年の秋、大学に進学したが、「学徒出陣」にぶつかり、学業半ばにして兵營の門をくぐった。日本をめぐる情勢はますます暗く、独伊軍の敗退、サイパン、硫黄島守備隊の玉砕、特攻隊の出撃、本土空襲、沖縄の悲報とあいつぐ中で、私の身边にも確実に「死」が迫っていた。

一九四五年の夏、暗雲におおわれた日本列島に「特殊爆弾」の閃光がひらめき、一瞬にして十数万人が屍と化した。その生き地獄と焦土の中で、なお本土決戦を戦おうとしていた日本国民の耳に天皇の声が聞えたのである。

私はそのころ海軍航空隊に在つて茫然自失していたが、司令たちは占領軍の到着まえに機密書類をことごとく焼却し、進んで武装解除して、ささやかな軍需物資を手みやげに兵士たちを故郷に帰した。私も超満員の列車につめられ、いったん東京にもどつたが、そこで見たものは一面の焼け野原と焼ビルの廃墟と闇市と、瓦礫のあいだに雑踏する不思議に生氣にみちた群衆の姿であつた。私はその雑踏する大都会の荒野をあてどなくさまよい、無明の青春の日々をすごしたのである。

こうした敗戦までの二十年の歴史には、その時代を生きた国民に共通する多くのものがあつた。そこで私も自分の保有していた資料を手がかりに、この戦争時代の忘却の底に眠っていた個人史を掘り起し、その主体と状況の内的結節点にメスを入れつつ積極的に「私」を押しだした自分史を記述してみたい。